

令和 6 年度 学校評価シート

学校名：南紀高等学校（定時制課程）

校長名：松下重喜

目指す学校像・育てたい生徒像（スクール・ポリシー等に基づいて記載する）

・生徒が誇りを持ち、地域に信頼され愛される学校

・社会に必要なコミュニケーション力や基礎学力を身に付け、粘り強く取り組む力や公平な批判力を持つ生徒

・今の自分や将来の自分を大切にしたいと思える自己肯定感を持ち変化の激しい環境をしなやかに強く生き抜く生徒

・社会に参画し地域の担い手になろうとする生徒

学校評価の公表方法

学校運営協議会において分析と説明をし、指導助言をいただくとともに、教育振興会においても評価結果を報告し、ホームページに公表する。

現状・進捗度	A	十分に達成している。（80%以上）
	B	概ね達成している。（60%以上）
	C	あまり十分でない。（40%以上）
	D	不十分である。（40%未満）

自己評価（分析、計画、取組、評価）							
番号	計画・取組				評価（1月14日現在）		
	重点目標	現状	具体的取組	評価項目と評価指標	進捗度	進捗状況	今後の改善方策
1	人間力の育成	B	自己有用感・肯定感向上のため、SC、SSWと連携したソーシャルスキルトレーニングを行う。	実態把握や行動観察を基盤とした対象生徒における成長の促進	B	委員会を設置し取り組みを行っている。SSTに繋がっている部分もあるが、組織的に取り組む必要がある。	・生徒や地域が求める人材育成に則した教育課程をもとにした授業展開の実現
			社会の形成者としての自覚を高めるため、学校の特色を生かした教育課程の工夫に取り組む。	各部会・委員会等での検討を基にした教職員の協働性の向上	B	個別の支援計画をベースに全職員が共通理解を図り取り組む必要がある。	・情報化が進む今日、情報教育の充実を図り、トラブル等に巻き込まれないため講習会を開催
			生徒のコミュニケーション力向上のための情報リテラシーに関するLHR、教職員を対象とした校内研修・現職教育の充実を図る。	特別活動部・生徒支援委員会を中心に、LHRの計画・各種研修の実施	B	外部機関と連携を図り、各講座を計画・実行している。一定現職教育を通じ個に応じた対応の実施に努めている。	・早期からの支援を実現するため、保護者アンケートを実施し、課題の洗い出し、支援・指導への展開手順をフローチャートにし取り組む
2	学力の向上	B	基礎学力向上のため、各種支援事業を活用するとともに、授業形態等の工夫から生徒の個別課題に対応する。	・出席状況と学習定着度 ・補習授業の実施 ・TTや習熟度別授業の実施	B	TTによる授業展開を行っている。個に応じた補習等に力を入れ、学力の定着と学力を伸ばす工夫が必要である。	・学び直しの強化を図る
			ICT機器、視聴覚教材及び実験実習等を活用し、魅力ある授業・楽しい授業・思考を巡らせる授業を展開して、分かりやすい授業の実践を目指す。	・研究授業、参観授業の実施 ・ICT機器の活用、ICTを活用した授業の実践	B	一人1台PCを活用し板書の見やすさには一定の効力を発揮している。さらに調べ学習等での活用を期待する。	・補習を通して、学力の定着を図る ・一人1台PCの活用について、職員の研修を積み重ねる
			学習指導要領に基づく、個別の知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等を育成する。	・振り返り学習の実施 ・主体的・対話的で深い学びを実現するための学習活動の実践	B	生徒の特性を理解した上で、展開方法を考え、主体的・対話的で深い学びの実現に努める必要がある。	・教師間での研究授業や授業参観を行い、個人のスキルアップに繋げる
3	自律性・社会性の涵養	B	普段の授業や学校行事等を活用し、規範意識の向上に努める。	集団行動を伴う行事展開の多用や拡大	B	時間を守る・人の話を聞くとことについてはできているが、中学時代の不登校が起因してか希薄な友人関係やトラブルがよく見られる。	・生徒の自主的な活動を支援する ・全職員共通理解の上で規範意識の醸成に努める
			外部人材を活用し、職業観や社会性の向上を図る。	地域人材やOB等による講師招聘と活用	B	サポステ等による就職に向けての講師派遣を依頼し実施している。探究の面では地域人材の力を借りることができている。	・同窓会との交流を図る ・教育振興会との交流を図る ・学校運営協議会との交流を図る
			地域社会との連携を強化し、包括的な社会性の育成を目指す。	連絡を密にした情報の共有と実践の蓄積	C	地域との連携については、全くできていない。まずは防災連携等から進めて行きたい。	・PTA役員との交流を図る ・上記4会との、交流・意見交換を管理職だけで無く、全職員・生徒会役員で行う

学校関係者評価（2月12日実施）

○生徒の家庭環境、生徒自身の発達課題等により「困っている生徒」が多いが、現段階で支援委員会を設立し学校だけではなく、行政、児童相談所、医療、福祉との連携を果たし指導を行っている。さらなる強固な組織連携による支援体制の確立を願う。（特別支援の観点）

○障がいや課題に対して、保護者、本人の需要につながるよう小中学校で指導することで、高校生活が変わるのではないかと、需要の難しさはぬぐい切れない。（特別支援の観点）

○生徒たちが多くの事柄を経験することで、自分の存在意義を見出すことでステップアップにつながる。（特別支援の観点）

○課題に対する「需要の難しさ」がある。幼少期からの検診等での告知と個別最適な指導方法について行政と保護者間の共有を図ることが大切ではないか。（特別支援の観点）

○南紀祭での育友会の活動の「茶粥コーナー」を地域の人と一緒に取り組むことで地域の方との触れ合いを通して南紀高校を知ってもらうのも一手ではないか。（南紀高校の生徒の活動をPR）

○南紀高校の持ち味（授業展開、指導の手厚さ、進学状況、就職状況）を中学生やその保護者に知ってもらう。（南紀高校の生徒の活動をPR）

○特別支援教育や教育相談を熟知した教員配置が必要ではないか（専門知識のある職員）

○手厚い指導をしていることで先生方の負担が増大するので職員数が増えればいいのかが無理なのか。（教員数）

○地域課題を探索（地域の課題をインタビューし、地域課題を解決するため役所や企業とともに考える）することで地域とのつながりができる。それは就職にもつながっていく。（南紀高校の独自性・探求・進路・つながり）

○フィールドワークが生徒の心に残り響くのではないかと。（南紀高校の独自性・探求）

○学業だけではなく、社会貢献に力を入れることが大切ではないかと。（南紀高校の独自性）

○起業に向けてのアドバイスを提供することは可能である。生徒にアンケートを取りどのような会社を起業するのか具体的な構想をともに考え法人登録までのアドバイスを提供することも可能なので活用してください。（起業）

○ビジネスプランコンテストに応募していくような授業の展開を考えてみてはどうでしょうか。